
エミナシ

海桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エミナシ

【Nコード】

N27480

【作者名】

海桜

【あらすじ】

「エミナシ」というあだ名を持ったクラスメイトと普通の男子高生の小説。

これだけでも大丈夫なように書きましたが、続きは書くつもりでいます。

俺のクラスにいる、笹野笑美菜。

「笑美菜」という漢字を書いて「えみな」と読むなんともニコニコしていそうな名前なのだが、誰もその子が笑ったところを見たことがない。彼女はいつの間にかエミナシと呼ばれていた。

エミナシはホームルームでも休み時間でも静かに一人本を読んでいる。

決して友達がいなくても、何を読んでいるのか聞けば教えてくれるし、友達に誘われて買い物に行ったりすることもあった。だ。

でも、自分からは話しかけない、変わったやつだ。

そんなエミナシだから、生徒からあまり人気のない担任の松瓜が妊娠したときも、ほかの人がするように笑って社交辞令の「おめでとう」といったり、代理の先生が来ると楽しみにして小さくガッツポーズしたりせずに、じっと松瓜のほうを見てからすぐ本の続きを読み始めていた。

松瓜が産休を取ってから3週間後。俺はエミナシと一緒に日直になった。

俺が日誌を書き終わり、黒板を消している途中、教室の後ろにある「明日の日程」というボードに書き込んでいたはずのエミナシが突然姿を消した。胸騒ぎ。なぜか俺の頭の中で、屋上から飛び降りるエミナシの姿がよぎる。けしかけの黒板をほったらかしにして、屋上へ駆け上がった。

屋上には誰もいなかった。下を覗いてみても誰も倒れていない。ほっとしたのと同時に、じゃあどこに消えたのだろうと、別の疑問が浮かび上がってくる。屋上からの階段を下り、職員室のほうへ向かった。

先生、笹野さんがいなくなっただんです。どこにいるか知りませんか。そう聞くつもりで。

予定とは裏腹に、エミナシは職員室につく前に見つかった。というより、職員室の前で見つけた。ちょうど職員室のドアを閉めているところだったが、俺を見るなり困惑した顔になった。

「葉空、こんなとこで何やってるの？」

彼女が俺の名前を呼ぶのを聞いたのは久しぶり・・・いや、初めてかもしれない。

さっき言ったように、彼女はめったに人に自分から人に話しかけないのだ。

些細なことと笑つかもしれないが、名前を呼んでくれたことや、自分から進んで話しかけてくれたことは俺には少しうれしかった。

「いや、エミナシが急に消えるから・・・」

「日誌届けに行っただけだよ」

あっさり答えを言ってくれたな。心配してやったこっちの身にもなっただけだ。

俺はさつき脳内をよぎった光景のことをすっかり忘れて、エミナシと一緒に教室に戻った。

帰り道は途中まで一緒だった。

エミナシは徒歩40分ぐらいのところに住んでいるらしい。

エミナシが何も言わなくて少し気まずかった俺は、いろいろな科目の先生の文句を言い始めた。数学の三山は自分に都合のいいことを言う、物理の木月はただの勘違い男だ・・・

3週間顔を見ていない松瓜の文句でも言おうとしたとき、エミナシは俺をさえぎって20分ぶりに声を出した。

「松瓜先生はやく帰ってこないかなあ」

それは俺に言ったというよりつぶやいたという感じだったが、そういわれては文句など言えない。彼女のさびしそうな表情を見たらなおさらだ。そうだな、と今度はこっちが無口になってしまふ。しかしエミナシはそれ以上言わずに口をつぐんでしまった。

4

分かれ道のところでエミナシはまた口を開いた。

「私こっち・・・だから」

これは何のサービスだろう。口を開くことを嫌う、大して仲良くない女子生徒が進んで俺に向かって声を出していた。

「ああ、じゃあな」

分かれるのが少し惜しい。

明日になったら、また元通りになってしまふのか・・・

気づいたら背を向けて歩き始めたエミナシの腕をつかんでいた。

少しびっくりした目がこっちを向く。

「お・・・送ってく」

送っていかないといけない気がした。

何かが起こってしまう気がしたのだ。

しばらく間があつて、こくん、とエミナシの頭が前に倒れた。

それがうなずきと気づくのに少し時間がかかったが、俺たちは歩き続けた。

30分ほど後、俺たちは「笹野」と書かれた表札がある家の前に立っていた。

「暗くないのに・・・送ってくれてありがとう」

エミナシは少しうつむき加減に言った。

お礼が、こんなにかわいく聞こえるとは知らなかった。

「別に、暗くなくたって危ないときは危ないから」

赤くなつてるだろう顔を見られないよう、上を見ながら答える。

「じゃ」

短く別れを言って、自分の家に向かおうとしたとき、後ろから声がかかった。

「葉空！」

声は、紛れもなくエミナシのもの。

振り向くと、声をかけたはいいが何を言ったらいいかわからないという様子のエミナシがこっちを見ていた。

「えっと、あの、その・・・ありがとね！また明日！」

ほほえみ。

不意打ちだ。

エミナシが、あの「エミナシ」が笑った。

無理だ。

もう赤くなつた顔を隠しようがない。

落ち着かない心臓を無理やり落ち着かせた。

「おう！また明日な」！

(後書き)

読んでくださってありがとうございます。

誤字・脱字などありましたら感想にて報告ください。

コメントお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2748o/>

エミナシ

2010年10月12日09時25分発行